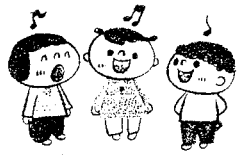


# ゆりかご園だより

2018・11・1



3期(10~12月)のねらい 手を使って作りだす活動を中心に園生活を豊かにしよう

ある研修会で聞いた話です。

『壁ぺたん、お口チェック、手はおひざ』...。子どもたちをスムーズに保育するためのことばだそうです。大人の都合に思えるのですが...

部屋の壁に背中をつけて座る“壁ぺたん”、おしゃべりをさせない“お口チェック”、保育士の話に集中し友だちにちよっかいをかけないよう“手はおひざ” このことばが呪文のように保育の中で使われている。そういう文化が根付いている園があるのだそうです。このような保育を受けた子どもたちの主体性はどう育つのだろうと、講師の先生は憂っていました。

この話を聞いた時、保育士時代に担当した子どものお父さんとのエピソードを思い出しました。

北大に勤務するこのお父さんは、日頃から仕事中、構内にあそびに来る子どもの声をほほえましく思っていたそうです。園に迎えに来たお父さんに「先生、今日大きな声で子どもたちを集めていたね」と言われ、私は聞かれていたのかと、取心ずかしくて顔が赤くなりました。

しかし、その後続いたことばに“なるほど”と思ったのです。

「保育園に帰るよー！」という先生の大きな声を聴くと安心する。笛を鳴らして子どもたちを集めている園もあり、笛で行動を促されて育つ子どもたちは、将来どんな大人になるんでしょうね」と。

もうずいぶん前の話ですが、当たり前前に思っていた保育観を考へさせられました。

他園を見学する木縁会も多く、自園の保育に活かしたいことがいっぱいあり大変勉強になります。しかし、中には保育室から移動する際は整列してクラス全員で移動しなければならないとか、排泄の際は“きしゃほろぽ”と称して、前の子の服の裾をつかんで連なり、これまた全員で一列になら、トイレに行くなど、子どもたちから不満は出ないのだろうか、自由にトイレに行けぬのかと、疑問をもつこともあります。

今一度、ゆりかごの保育を振り返り、子どもの主体性を育む保育者の役割を見つめ直したいと思います。